シンポジウム報告

安政遠足侍マラソンにみる文化資源化

板橋　春夫（ITABASHI Haruo）

Ansei Toashi Samurai Marathon and its Utilization as a Cultural Resourse

はじめに

クーベルタンの提唱で近代オリンピックが始まることになり、1896年にギリシャ王国アテネで第１回オリンピックが開催された。オリンピックの最終日のクライマックスを飾るのは男子マラソンである。オリンピックのマラソンは、1908年のロンドン大会ごろから体制が整い、走行距離が42.195kmとなった。この距離数が1924年パリ大会以降固定され現代に至っている。近代オリンピックでマラソン競技が行われる以前に、日本でそれに類した行事「遠足（とおあし）」が行われていたのである。古代オリンピックのマラソン競技が久しく忘れられていたように、わが国の江戸時代に行われていた遠足も長く記憶の彼方にあった。それがたまたま文書史料の発見によって現代に復活することになった。

本稿は、江戸時代に遠足と呼ぶ長距離走競技がどのように実施されたのかを文書史料を紹介しながら考える。江戸時代に実施された遠足が、どのようにして現代に蘇ったのか。そして、遠足という歴史的文化資源がまちおこしに活用される過程を考察してみたい。

１．最古のマラソン安政遠足

第１回オリンピックは1896年にアテネで開催されたが、江戸時代の安中藩が行った「遠足」は、それに先立つこと43年も前になる。まさに最古のマラソンと言っても過言ではない。安政２年（1853）の遠足は、その意味では、もっと宣伝されて良いかもしれない。本稿では、このマラソンが現在どのように実施されているのかをみていきたい。

平成28年（2016）の「安政遠足侍マラソン」は安中市が平成18年（2006）に周辺町村と合併を行って新生安中市が誕生してちょうど10周年を迎えることで、周年事業の冠を付けて「安中市合併10周年記念第42回安政遠足侍マラソン」として開催された。ゲストランナーに谷川真理を招いている。パンフレットには日本マラソン発祥の地と謳われている。160年前に安中藩士たちが汗を流して走った28.3キロを走るマラソンで、天候の良い５月に毎年実施されている。碓氷路を駆け抜けるランナーに沿道の人びとから声援が送られる。特に武者姿などに扮した仮装ランナーに応援の熱が入る。

実施要項によると、主催は安政遠足保存会と安中市の２団体で、安中市の力の入れようがわかる。後援には安中市の観光協会を始め商工会、青年会議所、新聞社などが入っている。協賛は地元の信越化学工業株式会社と東邦亜鉛株式会社、NTT東日本群馬支店である。安中遠足侍マラソンは、現在は２つのコースが設けられている。峠コース（28.97キロ）と関所・坂本コース（20.15キロ）である。峠コースは安中城址（武家屋敷）から熊野神社のコース、関所・坂本宿コースは、安中城址（武家屋敷）を出て、碓氷峠くつろぎの郷公園までである。峠コースには350名、関所・坂本宿コースには1650名の募集定員である。開催日は５月８日（日）であった。当日、午前８時

ちょうどにスタートの号砲が鳴る。表彰の内訳がユニークである。

峠コースの表彰は、仮装アイデア賞、着順による表彰（男女）、鍋吉賞（高齢者）、遠来賞（遠来参加者）、舎人賞（侍の仮装）、完走者賞、参加賞に分かれており、バラエティに富む。仮装アイデア賞は、さらに特別賞・仮装大賞・仮装アイデア賞の３つに細分される。仮装アイデア賞特別賞には賞状のほか磯部温泉宿泊券が授与される。各賞にも賞状のほか磯部煎餅などが副賞として授与される。第16回のときから受賞者へ地元の自性寺焼の陶製の賞状が贈られている。そして平成３年から関所・坂本宿コースを設けた。峠コースは、第１回（1975）がちょうど100名の参加であり、以後徐々に増えて、第14回（1988）に523人を記録。500人を超えたこともあり、第17回（1991）に峠コースと関所・坂本宿コースの２本立てとして、峠コースの参加者数を500人程度と抑えるようになったようである。第37回（2011）は、東日本大震災の影響で中止となった。近年は峠コース350人、関所・坂本宿コース1650名を募集定員としている。

この遠足は、スタートとゴールの高低差が1000メートルもある厳しいコースである。碓氷峠の急峻な坂道を走る。一方、関所・坂本宿コース（20.15キロ）は、峠コースに比べると難易度は低いがアップダウンがあるのが特色となっている。当日は、手作りの甲冑に身を固めたり、野武士、農民、飛脚など、江戸時代の各階層のコスチュームを着たり、あるいは映画やコミックの格好をしたり、参加者の半数以上が仮装で走る。参加者は仮装が多いため、普通のランニング姿で走るのは恥ずかしいほどのお祭り気分に満ちたスポーツイベントである。

２．安政遠足の古文書発見

ここに、一つの興味深い記事がある。小板橋靖正「日本最古の侍マラソン安中藩安政遠足事始」である（『上州路』昭和55年９月号）。小板橋によると、松井田町（現安中市）の歴史好きな役場職員が、峠の茶屋あずま屋の曽根氏と語り合ったとき、ふすまの下張りの話から古文書が大量に保存されていることを知り、調査する機会を得たという。調査に入ったのは郷土史家の本多夏彦で、その際に発見されたのが「安中御城内御諸士御遠足着帳」であった。保存していた曽根家は社家の組頭を務めた家柄である。多くの古文書が襖の下張りになっていたことが発見のきっかけとなった。

この発見のニュースがマスコミに知られ、当時としては大きなニュースとなった。その影響もあって、昭和30年（1955）11月にNHKラジオ放送で伊馬春部原作の「安政奇聞まらそん侍」が放送され、さらに翌31年には大映が「まらそん侍」と題した映画を制作した。勝新太郎と嵯峨美智子の主演で、１人の美女をめぐって２人の侍が競うというストーリーである。これらによって安政遠足が世間に知られるようになった。そして忘れかけた昭和50年（1975）５月、千葉市花見川団地の走友会の数名が横川関所から熊野神社までを試走したのである。この行動に地元の人びとが刺激を受けて安政遠足保存会が設立され、同年６月に第１回遠足が実施されたのである。第２回からは天候が安定している５月の第２日曜日の開催となった。

３．古文書の内容と分析

熊野神社の群馬県側の神主である曽根出羽家に伝わった文書によって、初めて当時の遠足の実態が明らかになった。その後、安中市史の編さんで資料収集が行われ、遠足の実態が明らかになった。まずは曽根家の文書を紹介する。

【史料１】　安政二年五月　「安中御城内御諸士御遠足着帳」

「安政二卯年五月十九日ヨリ
安中御城内御諸士御遠足着帳
　碓氷峠神主組頭」

五月十九日巳ノ上刻参着
　　黒田誠三郎殿
　　黒川鐘之助殿

柏瀬雅三殿
倉林愛之助殿
橋本鉞蔵殿
竹内粂三郎殿
丹所太平殿

同　廿一日辰上刻参着
弐番参着　小林房之進殿
同　和久沢文四郎殿
壱番参着　根本国次郎殿
三番参着　石井幸右衛門殿
弐番　植栗荘蔵殿
三番　山口徳五郎殿
壱番　石塚吉十郎殿

同廿二日巳ノ上刻参着
弐番　海保左次馬殿
同　根岸和太郎殿
壱番　福長五郎次殿
同　武藤喜八郎殿
同　海保岩五郎殿
同　雨森長五郎殿
三番　井田治平殿
壱番　小板橋幾次郎殿
三番　石井政吉殿

（五月）
同廿三日巳ノ上刻参着
壱番　岡村喜四郎殿
三番　木村文右衛門殿
壱番　根岸忠蔵殿
三番　武元清太殿
弐番　山田銕蔵殿
同　秋山十八殿
佐藤鎌蔵殿
横田左馬司殿

廿五日辰ノ刻参着　五ツ前御座候
四番　武井覚弥殿
五番　岡本善三郎殿
三番　黒田銕太郎殿
弐番　佐藤鎌蔵殿
辰ノ中刻四番　田口米作殿
弐番　横田左馬司殿
三番　田村　貢殿
壱番　吉田兵次殿
同　吉川嘉平殿
同　今井鯛助殿

廿七日辰ノ中刻頃参着　五ツ上刻ニ御座候
壱番　小林大吉殿
同　本多鏃蔵殿
弐番　小野富三郎殿

廿九日辰ノ中刻頃参着
鈴木高介殿
高橋平太殿
大原浪蔵殿
辰ノ中刻頃通過　金井茂平殿
鈴木保蔵殿
辰ノ下刻頃　渡辺盛蔵殿
曽江孫七殿
吉田良蔵殿
浅田庄吉殿
秋山鍋吉殿
高橋弁助殿
茂木瀧蔵殿

（五月）
三十日辰ノ下刻之頃参着
辰ノ下刻頃　小林嘉平太殿
同　石井峯吉殿
同　関口嶋治殿
同　樋口秀治郎殿
同　吉田信吉殿
同　山口団次殿
同　朝日奈友之丞殿

六月朔日辰ノ上刻参着
清水福太殿
竹内仲次殿
大久保豊平殿
須賀小兵衛殿
清水善吉殿
二日辰ノ上刻之頃参着
壱番　田宮宗吉殿
同　宮下仲蔵殿

同巳ノ上刻之頃参着

弐番　　遠藤松司殿
同　　須藤民蔵殿
同巳ノ中刻之頃参着
三番　　室橋和平治殿
同　　荻原弥三郎殿
同三日辰ノ上刻之頃参着
壱番　　渡辺友蔵殿
同　　高見沢徳二殿
六月三日辰ノ下刻参着
二番　　高橋六太郎殿
同　　真下喜多次殿
同　　清水重吉殿
同　　田中浪吉殿
同　　美濃部市重郎殿
同　　丹所勘八殿
同　　遠藤鉄弥殿
同月七日辰ノ中刻前頃参着
小板橋義平殿
根岸団蔵殿
白石賢助殿
小野盛太郎殿
大熊雄之丞殿
海保覚次殿
同月八日辰ノ中刻過頃参着
谷　熊蔵殿
田口弁蔵殿
田中宗次殿
同十一日辰ノ中刻過頃着
真下蒔太殿
日下部伝蔵殿
（六月）
同廿七日辰ノ下刻之頃参着
海保順三殿
田中豊七郎殿
同廿八日辰ノ中刻之頃参着
飯嶋伴四郎殿
野村喜左右司殿
五月十七日夜四ッ時過、御代官久保庭谷五郎殿ゟ御状ニ付、十八日未明出立安中江参候所、御家中御諸士方五十已下之面々、碓氷峠迄御遠足被成候ニ付、割附札五十枚御渡シニ相成、即受取帰宅之所暮ニ及、殊ニ雨天続ニ道あしく候ニ付、坂本宿ニ泊リ申候
十九日朝安中ゟ七人御出被成候ニ付早々坂本出立いたり、羽根石ニ而御遠足之御方御同道ニ相成帰リ申候、巳ノ上刻頃始而之日ニ御座候ニ付　熊野宮江御神酒差上、酒少々御出江出シ申候、御肴ひたら　みのほし大根　きうりもみ　力もち五ツツ、茶　右之品差上申候
御初穂
一、鳥目弐拾疋
一、同　拾疋
此御方御代官ニ而度々御出之義有之候故、別段ニ御初穂被上候事ニ候
（五月）
同廿一日辰ノ上刻頃参着
御初穂
一、鳥目弐拾疋　御一同様ゟ
一、廿四文　根本様
石塚様
一、力もち五ツツ、七人様江差出申候
みのほし大根口取ニ差上申候、茶差上申候
廿三日巳ノ上刻参着　実ハ辰中刻位かト思ひ候へとも、己ノ上刻ニいたし可申由ニ付、少々おそく認申候

御初穂
一、鳥目三拾疋　七人
供弐人
力もち　みのほし差出申候
御神酒酒肴差出シ申候、御呑不被成候、少々あかり申候
廿三日巳ノ上刻参着　実者辰中刻頃参着ニ候処、己ノ上刻ニ認呉候様ニ被仰候ニ付
御初穂
一，鳥目弐拾疋　六人
力もち　みのほし差出申候
廿五日辰ノ上刻参着　五ツ前ニ御座候

御初穂
一、拾疋　吉田兵次殿
吉川嘉平殿
今井鯛助殿
もち間ニ合兼、栗差出シ申候
同
一，弐拾疋　黒田銕太郎殿
佐藤鎌蔵殿
横田左馬司殿
田村　貢殿
力もち　みのほし大根差出申候
辰ノ中刻
同一，拾疋　田口米作殿
同一、拾疋　武井覚弥殿
同一、拾疋　岡本善三郎殿
力もち　みのほし大根差出申候
（五月）
廿七日辰ノ中刻参着　辰ノ上刻ニ御座候
御初穂
一、弐拾文　小林太吉殿
本多鏹蔵殿
一、拾疋　小野富三郎殿
此人腹中之由ニ付
御午差上不申候
力もち　みのほし大根差出申シ候
廿九日辰ノ中刻参着　少シ早シ
御初穂　弐文　鈴木高介殿
一、七拾弐文　高橋平太殿
大原浪蔵殿

同　辰中刻過
一、廿四文　金子茂平殿
一、三拾弐文　鈴木保蔵殿
同下刻　渡辺盛蔵殿
同
一、弐拾疋　曽江孫七殿
吉田良蔵殿
浅田庄吉殿
秋山鍋吉殿
高橋弁助殿
茂木瀧蔵殿
力もち　みのほし大根差出シ申候
三十日
同
一、拾疋　辰ノ下刻吉田信吉殿
同　山口団次殿
同
一、拾疋　同　石井峯吉殿
同　関口嶋治殿
御初穂　辰ノ下刻小林嘉平太殿
一、百五十銅　朝日奈友之丞殿
樋口秀治郎殿
力もち　大根切干差出シ申候
六月朔日参着
御初穂
一、弐拾疋　五人　一同
力もち　大根切干差出シ申候
（六月）
二日参着
同　一、六拾四銅　両人
右同断
同　巳上刻之頃参着
一、鳥目　拾疋　両人
右同断
三日
同
一、拾疋　両人
壱番　渡辺友蔵殿
高見沢徳二殿
右同断
同
一、鳥目拾疋二番　美濃部市重郎殿
同　丹所勘八殿
同
一、五十銅　同　真下喜多次殿
同
一、五十銅　同　高橋六太郎殿
同
一、廿四銅　同　遠藤鉄弥殿
同

一、拾疋　　同　清水重吉殿
同　田中浪吉殿
右同断差出申候
外
一、十二銅　　御供　壱人
同月七日辰ノ中刻前参着
御初穂　　小板橋義平殿
一、百五拾宛　　根岸団蔵殿
白石賢助殿
同辰中刻頃参着
御初穂
同　一、鳥目　拾疋　　小野盛太郎殿
一、同　　大熊雄之丞殿
一、同　　海保覚次殿
供弐人
同　八日辰ノ中刻過頃参着
一、五拾文　　谷　熊蔵殿
一、同　　田口弁蔵殿
一、同　　田中宗次殿
外　廿四文　　御守弐枚遣ス
六月二十七日辰ノ下刻之頃参着
御初穂
一、拾疋　　海保順三殿
田中豊七郎殿
力もち　うりもみ差出申候
同廿八日辰ノ中刻参着
御初穂
一、弐拾疋　　飯嶋伴四郎殿
野村喜左右司殿
餅　うりもち差上申候
（松井田町峠　曽根克巳氏所蔵）

【史料２】　安政二年五月　遠足規定書

覚
一　去十一日遠足之義披　仰出、大目付ヲ以向々江相達候義、別紙書付壱通遣之候、以上
両人
五月廿二日　　両人殿
五十歳以下諸士之面々、碓氷峠迄遠足之義披　仰出候、六七人ツヽ申合可相越候
但相越候節者前日大目付江届ケ可申候、大目付ゟ同日御近習頭ヲ以可申上候、御太鼓六ツ時出宅相越候砌、遅束無之様当朝一緒ニ御近習頭江相届可相越候、右前日申上相済候へ者如何様大風雨ニ而も可相越候、御関所番頭幷峠神主触流江兼相達置候間、何刻御関所通行、何刻ニ峠江参着与申書付請取罷帰リ大目付へ差出可申候、足痛等ニ而延引之義者無余義候得共、内々ニ而馬駕籠雇候而早々帰着之趣申成候輩有之、後日ニ達　御聴候ハヽ厳重ニ　御沙汰被及候間、兼而此旨可相心得候
右之趣被　仰出候間、向々江早々可被相達候
五月
（安中市教育委員会所蔵　小野直遣文書）

文書によれば、50歳以下の藩士98名が実際に参加した行事であった。すべての藩士に遠足を義務付けた点が興味深い。原則として６、７人ずつが１組になって走り、その結果を順番を付けるというものであった。遠足を実施するにあたり、曽根氏の祖先は５月17日の夜、代官久保庭谷五郎から手紙が来たので、18日未明出立し安中へ着いた。藩主は家中の諸士方50歳以下の人たちに碓氷峠まで遠足を実施すると伝えた。その記録係として神主が任命され、割附札50枚渡されたのですぐに受け取って帰宅しようとした。しかし、大雨になってしまったので坂本宿で休むことになった。翌朝起きると、安中を早朝出発して駈けてきた侍たちと一緒になってしまった。神主は慌てて一緒に走った模様である。そのためであろうか、１日目の走者の着順が不明なのである。

参着、即ち到着が辰の刻とある。辰の刻は現在の午前八時である。初日の５月19日の到着は「巳ノ上刻」（午前９時）であった。次の21日は辰上刻（午前７時）であった。スタートは朝六つの太鼓というが、正確な時間は不明である。大風雨であっても決行するようになっていたのは現在のマラソンに似ている。

ゴールの熊野宮に到着すると、まずは熊野宮に初穂を上げて祈っているのである。それからご馳

走として「御肴・ひたら・みのほし大根・きうりもみ・力もち五つ・茶」が振る舞われている。注目したいのは力餅であり、今も峠の力餅として売られているのである。遠足との関わりで興味深いのは、遠足の峠コースのゴールが峠の神社であること、そこで力餅が与えられていた点である。碓氷峠だけでなく、全国各地の峠には決まって力餅が伝承されており、歴史上の人物に仮託されることが多い。餅が間に合わない日もあり、その日は代わりに栗が代用されている。みのほし大根は「大根切干」という記述もあるので、恐らく切り干し大根のことであろう。夏なので、きゅうりもみが出されている。問題は帰りである。帰りは走ったとは書いていないが、駕籠に乗ったり馬に乗って帰るのは許されないとある。20代の若者にとっては20キロを駆けるのはさほどの苦労はないと思うが、50歳近い人にとってはとてつもなく大変な苦行と思われる。

おわりに

安中安政遠足侍マラソンは、昭和50年（1975）に始まった新しいものである。しかし、その原型は安中藩第15代藩主であった板倉勝明が発案した遠足という和製マラソンであるところが歴史的に貴重である。そもそもは幕末の激動期に、藩士の心身を鍛えることを目的に始められたものであった。それも日本を震撼させたアメリカの黒船を見て藩主板倉勝明は体力の必要性を感じたという。外部的要因がマラソンの実施につながっているのである。50歳以下の藩士に対し、強制的に安中城から碓氷峠の熊野神社までの７里７町（約29キロ）を走らせた。これは壮年武士に課せられた重要な体力勝負であったと言える。ゴールは碓氷峠の熊野神社で、同社は群馬県と長野県の県境に位置し、社殿は群馬県側と長野県側の両方にまたがる境界領域にある。ご褒美の１つに力餅があるのも興味深い。この安中市の安政遠足侍マラソンは、まさに歴史的記録の文化資源化の一例と言える。

侍マラソンの表彰の中に「鍋吉賞」というのがある。これは高齢のランナーを対象にしている賞であるが、その賞の由来がわからない。安政の遠足参加者に「秋山鍋吉殿」という人名が出てくるが、果たしてこの鍋吉と関係あるのだろうか。史料には鍋吉が高齢者であるという記述は見られないので、何をもって鍋吉が高齢者に関わってくるのだろうか、今後の課題の一つにしておきたい。

参考文献

阿久津浩司　1991　「我が町の教育・文化14安中市　安政遠足」『文部時報』1372号　文部省
淡路博和　2010　「『安政遠足・侍マラソン』―日本で最初のマラソン」『ランニングの世界』10　創文企画
安中市学習の森ふるさと学習館編　2011　『ふるさとの至宝―安中市の文化財―』安中市学習の森ふるさと学習館
安中市誌編纂委員会編　1964　『安中市誌』　安中市誌編纂委員会
安中市史刊行委員会編　2002　『安中市史第五巻近世資料編』　安中市
安中市安政遠足保存会・安中市編　2016　『安中市合併十周年記念第42回安政遠足侍マラソン』安中市安政遠足保存会・安中市
窪田　孟　2004　「日本最古のマラソン安中の遠足」『歴史研究』523号　歴研
小板橋靖正　1980　「日本最古の侍マラソン安中藩安政遠足事始」『月刊上州路』９月号あさを社
佐藤　勲　1978　「安中藩士・安政遠足の事（その一）」『宇須比』６号　松井田町文化会
佐藤　勲　1980　「安中藩士・安政遠足の事（その二）」『宇須比』７号　松井田町文化会
佐藤　勲　1981　「安中藩士・安政遠足について（その三）」『宇須比』８号　松井田町文化会
松井田町誌編纂委員会編　1985　『松井田町誌』　松井田町誌編纂委員会

写真 1　遠足規定書

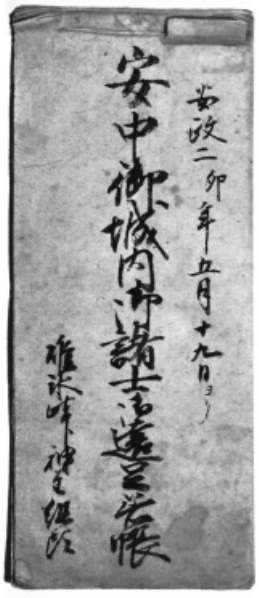

写真 2　安中御城内御諸士御遠足着帳（表紙）

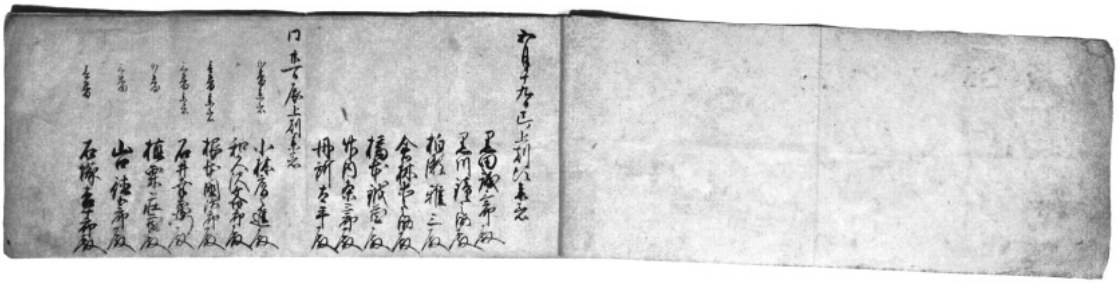

写真 3　同（内容の一部）